



## CEFRに準拠した独自のドイツ語教授法

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者: 室蘭工業大学<br>公開日: 2019-03-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En): Chunks, CEFR, Culture based<br>作成者: クラウゼ小野, マルギット<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10258/00009823">http://hdl.handle.net/10258/00009823</a>  |

# CEFR に準拠した独自のドイツ語教授法

クラウゼ小野 マルギット\*1

## Original Didactics for German based on the CEFR

Margit KRAUSE-ONO

(原稿受付日 平成 30 年 12 月 19 日 論文受理日 平成 31 年 2 月 1 日)

### Abstract

This article presents the joined teaching of German at MurooranIT. The curriculum and its implementation are based on the Common European Framework of Language References (CEFR) and chunks. The underlying reasons and their scientific basis are explained.

Keywords : Chunks, CEFR, Culture based

---

### 1 状況および枠組みの諸条件に関して

室蘭工業大学においては現在のところ、1年次の第二外国語は選択必修科目となっている（独・中・露から選択）。ドイツ語と中国語が12クラス、ロシア語が2クラスという構成で、授業は週に1回90分、1クラスが20~25人の少人数編成となっている。ドイツ語を母語とする筆者と日本人の非常勤講師2名、合わせて3名がその12クラスを担当している。シラバスは全クラスが同一の内容となっている。

2008年以降、第二外国語ではGER(CEFR)を導入し、授業では各言語がそれに準拠した同一の教科書を使用している。

ドイツ語では、2014年度までは教科書として『Und du?』（著者：Bertlinde Vögel, Anja Hopf、大阪大学出版会）を使用した。ほぼ隔週ごとに筆者が作成したCan-do-Listを配布し、無記名のまま記入されたそのCan-do-Listを提出してもらい、結果の分析を行った。負担軽減と授業内容の統一化を図るため、毎週、事前に対話例を含む明瞭かつ詳細な教授ポイントリストを日本人非常勤講師にメールで送付した。

また、会話例を録音し、大学のMoodleプラットフォームにアップロードし、学生たちが自由にそれにアクセスできるようにした。

2015年からはドイツ語教材の共通化を目指し、GER(CEFR)に準拠しつつ室蘭工業大学の実情に即した教材の開発に時間を工面しては取り組んだ。当初、教材はプリントの形で配布していたが、最終的に

\*1 室蘭工業大学 ひと文化系領域

それは1冊の本にまとめられた。

学期末には統一試験を実施しており、試験成績が全体的評価の60%、授業参加への積極性の程度が40%のウェイトを占めるよう配分されている。統一試験の実施にこぎつけることができたのは、2名の非常勤講師の協力が得られたからであり、それによって成績評価に大きなばらつきは見られなくなった。

## 2 教材および授業のコンセプト

第二外国語の授業時間は非常に限られたものであるため、我々は何よりもドイツ語の授業においては文法ではなくコミュニケーションな要素に重点を置くこととした。全ての教材のベースとなったのは、コミュニケーションに重要な役割を果たすチャンクスと慣用句、イディオムである。授業では日本語での説明はほとんどなされない。それに代わってジェスチャーとボディーランゲージが多用され、イントネーションの強調と補助的に英語での説明が行われる。

授業では遊びや模倣、体を使うといった要素を積極的に取り入れている。その効果もあり、学生たちは短時間のうちに話し始めるようになる。その練習に用いているのは、筆者が作成した現実を模した対話例である。学生たちはその練習が済むとすぐに、学習済みのチャンクスと慣用句を使い、ペア・グループそれぞれが内容の異なる自分たちの対話を始める。自由な対話は1分以上続いていく。その際、筆者或いは学生たち自らが発奮材料としてその対話の録音を行っている。

それぞれのテーマ毎に重要事項が漏れなく記載された Can-do-List は、自主的な学習の進捗・成果確認の里程標として利用される。例として以下に Can-do-List (3) を取り上げる。

| A  | B   | C     | D                  |
|--|-----|-------|--------------------|
| <b>私にできるのは？ (3)</b>                                  |     |       | <b>ドイツ語 I 2018</b> |
| 1. 0～100までの数をドイツ語で言うことができる。                          | できる | まあ何とか | あまりできない            |
| 2. 「どこの大学にいますか？」と尋ねることができる。                          | できる | まあ何とか | あまりできない            |
| 3. 2.の質問に答えることができる。                                  | できる | まあ何とか | あまりできない            |
| 4. 「専攻は何ですか？」と尋ねることができる。                             | できる | まあ何とか | あまりできない            |
| 5. 4.の質問に答えることができる。                                  | できる | まあ何とか | あまりできない            |
| 6. (第三者について) 「(彼/彼女)」の専攻は何ですか？ 大学はどこですか？」と尋ねることができる。 | できる | まあ何とか | あまりできない            |
| 7. 6.の質問に答えることができる。                                  | できる | まあ何とか | あまりできない            |
| 8. 情報工学/室工大etc.についてどう思いますか？」と尋ねることができる。              | できる | まあ何とか | あまりできない            |
| 9. 8.の質問に答えることができる。                                  | できる | まあ何とか | あまりできない            |
| 10. 「(今)何時ですか？」と聞くことができる。                            | できる | まあ何とか | あまりできない            |
| 11. 10.の質問に答えることができる。                                | できる | まあ何とか | あまりできない            |

図 1

それに該当するのが相手の年齢（または数や語彙、家族）に関する以下の2つのモデル対話である。

アンダーラインの引かれた箇所は、学生が個々に変更を加えたり適切な言葉に置き換えたりすることができる。その際に重要となるのは、言語構造の習得と練習に止まらない。会話が途切れたり最初の質問で話しが止まってしまうというような、多くのドイツ語教科書にありがちな事態に陥らないよう、「アハッ！」や「面白い」、「本当」といった特にコミュニケーションなやり取りのコントロールの仕方も忘れられてはならない。

A: Sag mal, Florian, wie alt sind deine Eltern denn?

F: Meine Mutter ist 46 und mein Vater ist 47 Jahre alt.

A: Mein Vater ist auch 47!  
 F: Aha, interessant. Und wie heißt dein Vater?  
 A: Er heißt Hans.  
 F: Wirklich?! Mein Vater heißt auch Hans! ... Oh je. Es ist schon 18:30 Uhr!  
 A: Wie spät ist es?  
 F: 18:30 Uhr! Ich muss los! Bis nächste Woche!  
 A: Ja, bis dann. Tschüss!

次の例は、簡単な話し言葉を用い、現実に近い形で語法の助動詞を学び、練習できることを示したものである。ここでもその内容は生きており、「Ich kann leider nicht .... », .... », Aber ich möchte es lernen!" によって対話は途切れることなく続くようになっている。

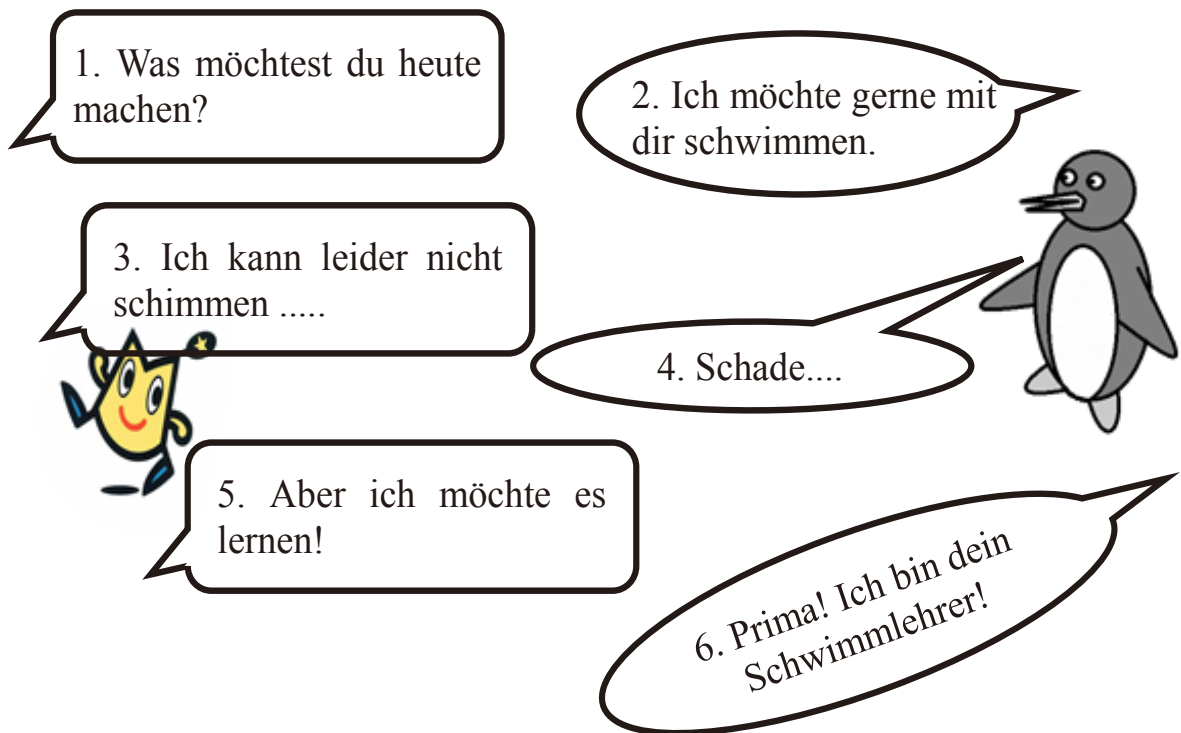


図 2

### 3 言語および文化間コミュニケーション

チャンクスと慣用句に焦点を当て、遊びの要素を取り入れながらやり取りさせることは、チャンクスの定着を助ける一方、学生たちがそれぞれ異なる言葉の組み合わせを生み出す動機付けにも役立っている。あたかもジグソーパズルをしているようなものであり、集中力も高められているのである。

„Kein Problem“ „Echt?!“ „Nicht so toll“ „Weiß noch nicht“などのような短い表現や „Wie heißt du denn?“といった簡単な質問でさえ、その言葉を発することで自他の文化間に関する学習とコミュニケーションが成立する。それらはコミュニケーション重視に方向付けられた言い回しや不変化詞として、それぞれの言葉や会話の成り立ち方の中に根を下ろしているものだからである。不変化詞„denn“が加わると、問いに含まれる微妙な差異は英語にも日本語にも翻訳することが不可能となる。それは文化に固有のものだからである。とは言え、使用される文脈が存在しなかったり文法的連関しか持たなかったりする個々の単語ではなく、全体すなわちチャンクスとしての表現に焦点が当たる場合にのみ、コミュニケーション時の文化間的要素は認識される。言葉そしてまた基本的表現や慣用句を通じて、我々は他文化への理解の手がかりを得る。そして他文化がどのようなイメージやコンセプトに従ってそのコミュニケーション

ンと文化を含む日常生活に形を与えているかを認識することが可能となる。そのことやチャンクスに関しては、数多くの論文が発表されている(Aguado, 2014; Kozawa, 2017; Mauranen, 2012)。

教材は、対話例同様、集録資料に基づいた言語材料を利用すれば改善が可能となる。例えばドイツ語の話される日常生活において、', bitte', と ', danke', は, 'Entschuldigung'に比べ、はるかに使用頻度が高いことは言うまでもない。我々が取り組んでいるのは、文法と言葉を分離させない方法の実現である。チャンクスは、他文化への関与を可能としそれを必要とする。神経言語学的認識は、この点を強調するのに大きな力となっている。我々の脳は部分に置き換えた後で言葉を加工する（つまりチャンクス）のであり、文法的分析を加えた後ではない (Vetchinnikova et al, 2017)。また、チャンクスには常にその時代の文化が表現されているのである。

この意味において Karin Aguado の引用文(2014) で最後を締めくくるのは、指標となるモットーとして本論考で取り上げられ紹介されたコンセプトに相応しいものと言えるであろう。

「全ての言語・言語共同体は、このような言語および文化に固有のものとして特徴づけられた表現手段を持つ。それは共有された言葉の使い方の知識に属する。語用論的にその表現手段は、その言語共同体の一員であることとインタラクティブで協調性のある順応によってそれぞれの文化的実践へ参加すると同時に結局は文化に固有の知識の保持と伝承を表現するのに役立っているのである」

## 文献

- (1) Aguado, Karin, Kannst Du mal eben...? In: *Magazin/Extra*, n.1, 2014, p 5-9.
- (2) GER = Goethe-Institut, der Ständigen Konferenz der Kulturminister der Länder in der Bundesrepublik Deutschland (KMK), der Schweizerischen Konferenz der Kantonalen Erziehungsdirektoren (EDK) und dem österreichischen Bundesministerium für Bildung, Wissenschaft und Kultur (BMBWK) (Eds): *Gemeinsamer europäischer Referenzrahmen für Sprachen: lernen, lehren, beurteilen*. Translated into German by Jürgen Quetz. Berlin, München: Langenscheidt, 2001.
- (3) Kozawa, Yoshiko, The Effect of Communication Strategies on Learners' Speaking Ability in Task-Based Language Teaching: A Mixed Methods Analysis. In: *The Language Teacher*, 41.2, 2017, p 9-15.
- (4) Krause-Ono, Margit, Using German Can Do statements as model for other languages like Russian and Chinese: A special project In: M. G. Schmidt, N. Naganuma, F. O'Dwyer, A. Imig, K.Sakai (Eds.): *Can do Statements in Language Education in Japan and Beyond - Applications of the CEFR -*. Tokyo: Asahi Press, 2010, p 111-125.
- (5) Mauranen, Anna, Chunking in ELF: Expressions for Managing Interaction. In: *Corpus Linguistics, Vol 1: Lexical Studies*. Biber, D. & Reppen, R. (eds.). Los Angeles: Sage, 2012, p 271-286.
- (6) Vetchinnikova, Svetlana, A.K. Mauranen & N. Mikusova, ChunkitApp: Investigating the relevant units of online speech processing. *INTERSPEECH 2017: 18th Annual Conference of the International Speech Communication Association*, 2017, p 811-812.
- (7) Vögel, Bertlinde & Anja Hopf, *Und du? Sprechsituationen im Unterricht - Neu*. Osaka: Osaka University Press. 2006.
- (8) 吉島茂, 大橋理枝, *外国語教育 (2): 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠*, 東京: 朝日出版社, 2004<sup>1</sup> 2014<sup>2</sup>.